

2022.8
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やま 富 薬

8号

第44巻
No.397



クズ *Pueraria lobata* Ohwi (マメ科 *Leguminosae*)

生 薬 カッコン（葛根） 秋から冬にかけて肥大した貯蔵根を掘り取り、水洗し、コルク皮を剥いで縦割り、またはサイコロ状に切ってから陽乾する。

成 分 イソフラボン誘導体：daidzein, daidzin, puerarin, genistein, formononetin, kakkonein, puerarol、サポニン：soyasapogenol A, B, C, D, E, F、芳香族配糖体：pueroside A, B等。

効 能 発汗、解熱、鎮痙作用があり、主に葛根湯などの漢方処方に配合される。民間では風邪に葛粉をお湯で溶いて用いる。また葛花を二日酔いに用いる。



生薬 カッコン（葛根）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



北海道から奄美大島、中国、朝鮮半島、台湾、フィリピン、ニューギニアなどに分布し、日の当たる山野の林内や林縁、土手などの荒れ地に多く繁茂する大型のつる性草本で、茎の基部は木質になり10m以上にも伸び、杉などの樹木に巻き付き、覆いつくすことから林業者にとって厄介な植物といえます。19世紀にその旺盛な繁殖力から飼料用作物として、また庭園の装飾用作物として北米に持ち込まれましたが、現在では侵略的外来植物に指定されるようになってきました。根は肥大した長芋状の塊根で長さは1.5m、径20cmにもなり、デンプンを多く貯めこむ貯蔵根になります。葉は大型の三出複葉で、長い葉柄は互生し、直径15cm以上の頂小葉は菱形円形で側小葉はゆがんだ円形、葉質は厚く上面は緑色、裏面は白い毛を密生して白色を帯びているところから、「裏見草」、転じて「恨み草」と呼ばれ、『古今和歌集』(905)に「秋風の吹き裏返す 葛の葉の うらみてもなほうらめしきかな 平貞文」と詠まれています。花は8-9月の秋に咲き、葉腋から総状花序が上向きに立ち上がり、濃紺紫色の甘い芳香を発する蝶形花を房状に密集してつけ、下から順に咲かせます。花後に褐色の剛毛に被われた枝豆に似た、長さ15cmほどある扁平な果実を結びます。

厄介な植物である反面、利用価値は高く、その繁殖力旺盛なところを利用して葉や軟らかい茎を飼料用にしていました。根や花および根から取ったデンプンを薬用として用いるだけでなく、葉は切り傷の止血に用います。葉、花、若い茎、根は救荒食としても重要で『救荒本草抜粹』(1828)に「若葉はゆでてくうべし。老葉はほして和え物などにすべし。また、ほしていりこにすべし。花は茎と共にゆでて食うべし。ゆでる前に干せばなおよし。また塩漬などにもすべし、根は蒸してくうべし。また、ひきこにもいさしこにもすべし」とほとんどの部分が食用になることを述べています。中国の『図経本草』(1062)には「根の形は、太さ手の臂ほどあって紫黒色だ。五月五日の午時に根を採って曝乾する。土中に深く入ったものほど佳し。今は一般に多く粉にして食う」とあり、古い時代から食用にしていたことが分かります。干ばつなど災害に強く、どこの荒れ地でも生育することから平時に葛粉を取り、救荒時に備える保存食品としての価値は見逃せません。葛粉を取る技術は『本草衍義』(1119)に「澧州、鼎州地方では、冬期に生葛を取って搗き爛らし、それを水中に入れて粉を揉み出し、澄まして澱んだものをつね固めて置く」とあります。日本では鎌倉時代の医学書『頓医抄』(1303)に「葛の粉をかたく練って多服すべし」とあるところから平安末から鎌倉時代には葛粉が製造され、使っていたと推測されます。今ではわずかですが各地で製造され、高級デンプンとして葛切り、葛饅頭、葛餅、葛湯などで使われています。

他に茎を砕いて、繊維を取り「葛布」を織ることは古くから行われていました。『論語』(孔子BC552-479)にはたびたび登場し「暑い盛りには練り葛の単衣を着、外出時には必ずさらに上着を着ける」とあるところから夏の衣服に利用されていたようです。『万葉集』(7C-8C)に「おみなえし 咲き沢の辺の 真葛原 何時かも練りて 我が衣に着む」と、葛が衣服の原料であったことが歌われています。江戸時代になると、葛布は軽くて通気性が良いことから、袴、袴、陣羽織、袴等に用いられていました。『大和本草』(1709)には「其のかつらを用て縄とす、皮を布とす。葛布をかたひらとす。和漢同じ。又喪服とす」とあります。しかし、明治維新後葛布の衣料としての需要は激減しました。今では襖・壁紙等インテリアの分野で使われています。

(村上守一 記)